



経済停滞・暮らしの困難を 打開する対策を

コロナの影響やエネルギー、資材等の異常な高騰が続く中、ある業者さんは「リーマンショックの時も苦しかったが、今回はまるで別世界にいるよう」と、窮状を訴えられました。そこへコロナ対策の融資の返済も始まり、苦難が増えています。

こうした中、累積債務等に苦しむ業者への支援策を要望しました。産業労働部長は、県は、大変厳しい業者も一定数あることを認識しており、新たな支援資金制度も創設した、また、実情に応じた支援に取り組むと答弁しました。

＊長野県の会計年度任用職員（非正規雇用職員）の賃金引き上げ、公共工事や業務委託における従事者の適正な賃金の確保に関する質問は、裏面をご覧ください。

特別支援教育の充実のために

特別支援学級できめ細かい支援を行うために、学級編成の基準を8名から6名にすることと、コーディネーターの専任化を求めました。また、児童生徒が通常の学級から特別支援学級にうつり30人規模学級の基準を割ることになっても、クラスを維持するよう柔軟な対応を求めました。

教育長の答弁は、教員配置に財源がかかること等を理由に、いずれも消極的でした。特別支援学級が、障がいを持つそれぞれの児童生徒に応じた指導、自立の支援の場となるよう、引き続き充実を求めています。

水道広域化ありきではなく 地域の特性踏まえて

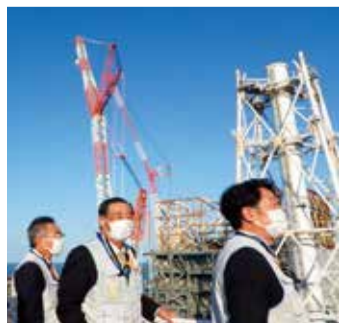
人口減少、施設や設備の老朽化などから、水道を広域化する計画が進められ、先行して長野市から上田市までの広域化が取り組まれています。シンポジウム等も行われていますが、住民の不安や疑問があっても、強硬な国の姿勢が目立ちます。広域化、効率主義ありきではなく、水源が多様で施設も身近な長野県の特性を踏まえるよう求めました。

知事は、県は国の下請け機関ではない、地域の実情に応じて検討、丁寧な合意形成を支援すると答弁しました。水は命。自治が基本です。計画を検証し、ただしていきます。



水道の未来を考えるシンポジウム
（長野市芸術館 11月3日）

東京電力福島第一原発を視察



福島第一原発の1号機
（10月31日）

東京電力福島第一原発と福島県の復興状況を、総務企画警察委員会で視察しました。

原発事故から12年が経過しても、1号機はガレキと鉄骨がむき出しで、使用済み核燃料や燃料デブリに手もつけられない状態。構内の惨状に、原発が抱える危険性と事故被害の甚大さ、深刻さを実感しました。



本会議で一般質問（12月6日）

地方鉄道存続へ抜本的対策を

しなの鉄道や県内の地方鉄道の経営難は深刻です。背景には、利用者の減少、少子化などがあり、事業者頼みのやり方は限界にきています。

県のいっそうの支援策とともに、鉄道の公共性を踏まえて、国が線路・駅などを保有・管理し、運行を事業者が行う上下分離方式の導入を国に求めるよう提案しました。



しなの鉄道の本社で懇談・視察（11月21日）

千曲大橋（仮称）の早期建設を

長野市長沼と須坂市豊洲間を結ぶ「千曲大橋」の建設を求める期成同盟会の、請願や要望活動に同行。

災害時の避難ルートとして地元のみなさんの期待の声などを紹介し、早期建設を求めました。



県議会正副議長への請願（10月20日）

「飯綱町と食べごと文化」を視察

県政にとって大切な身近な農と食の文化を大切にしたい地域づくりを視察し、山里の風土が生んだ四季の食に、豊かな恵みを感じました。（主催：いづな歴史ふれあい館）



箱膳に「やたら」「タケノコ汁」「きのこ飯」…。とても美味しそうでした。（11月5日）

